

授業という場における相互行為のメカニズム  
—中国の大学における日本語授業を分析対象に—  
(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号:D190828

氏 名:黄 潔

授業という場における教授と学習は、教師と学生、ならびに学生と学生の相互行為(interaction)を通して実践される。その過程には、様々な言語的・非言語的「相互作用資源(interaction resource)」が織り込まれている。本研究は、授業における相互行為の様相に着目し、応用言語学の立場から授業という場における教授・学習過程の在り方や授業の「構造基盤(infrastructure)」を探究するものである。

1960年代に、授業研究(classroom research)とディスコース研究(discourse studies)の融合によって、授業のディスコース研究(classroom discourse studies)が1つの正式な研究分野として成立した。それ以来、授業のディスコースに関しては膨大な数の研究が蓄積されており、諸々の有益な知見が得られた。近年になって、授業を小さな社会と捉え、そこにおける参与者間の「相互行為」や「相互作用」を実際の文脈の中で読み解いていく研究が増加している。特に、応用言語学の分野では授業現場における教師と学生、あるいは学生と学生との相互行為を「微視的に」かつ「実証的に」分析する研究が多く見られるようになってきている。だが、先行研究を精査した結果、次の2点について、まだ研究する余地が残されているように思われる。(1) 言語的行為と非言語的行為とが実際には共存して一つの全体的な行為を形作っているのだが、その二つの側面から授業内での相互行為を総合的に捉える研究が少ない。(2) 先行研究の大半は、教授・学習の過程に着目するものの、教師の教授ストラテジーあるいは学生間の協働学習や学生どうしの行動などに重点を置いている。つまり、教師と学習者の発話が別々に考察されることが多く、授業内での相互行為の全体像を捉える研究は管見の限りでは数えるほどである。以上を踏まえて、本研究は、教師と学生が言語的・非言語的資源を用いながら協働で展開する複雑な相互行為のメカニズムに着目し、応用言語学の立場から授業という場の規則性、多層性、さらに動態について分析し考察する。

本論文は8章から構成されている。以下に各章の概要を述べる。

第1章では、研究の背景として、授業における相互行為の様相や授業のメカニズムを明らかにするための実証的研究の必要性を論じて、本研究の分析対象とする中国の大学における日本語授業の実施状況について説明する。同時に、授業のディスコース研究の系譜を概観し、本研究の課題や位置づけについて述べる。

第2章では、本研究で採用する理論的枠組みについて論じる。次いで、分析対象とするデータの収集方法や概要およびデータを文字化する方法について説明する。

第3章では、授業の開始部に着目し、参与者間の相互作用の観点から分析する。分析の結果、主に以下の2点が明らかになった。(1) 日本語授業の開始部では7種類の構成要素が観察され、授業における出現順序にも一定のパターンが見られる。開始部の構造はある程度定式化されていると言える。(2) 参加者の授業における最初の行為から、授業の主要部の切り出しまでの流れは、教師が主導しているものの、教師の導入発話だけで完結するものでは

なく、教師と学生の言語的・非言語的的行為によって協働的に構築されるプロセスが存在する。この段階において学生の発言は少ないものの、非言語的の反応は頻繁に行われている。

第4章から第6章は授業の展開に関する考察である。

第4章では、授業における相互行為の展開構造に関して、「IRF連鎖システム(I: Initiation、R: Reply/Response、F: Feedback/Follow-up)」という理論を用いて分析を行う。分析の結果、「IR」、「IR」、「IRF(R)」、「IRF(R)」、「IRIR<sub>i</sub>(…IR<sub>n</sub>FR)」、「IRFR<sub>i</sub>F<sub>i</sub>(…R<sub>n</sub>F<sub>n</sub>R)」といった授業における相互行為展開の6種類の基本形態と、「逐次的展開」、「放射的展開」、「内包的展開」といった授業内での行為連鎖の3種類の展開形式が抽出された。授業における相互行為はその6種類の基本形態や基本形態どうしの様々な組み合わせ、さらに、それらと3種類の展開形式との組み合わせによって構築されていると考えられる。

第5章では、授業内の相互行為における参与フレーム(参与者間の役割関係)に着目し、その共時態および通時態について分析を行う。具体的には、「隣接ペア」ならびに「話段」という分析単位で、参与フレームのパターン(11パターン)およびその形成要因(3つの要因)と移行形式(4種の移行形式)を明らかにした。さらに、これらの分析結果に基づき、参与フレームのバリエーションとその動態を可視化するためのモデル構築を試みた。なお、参与フレームは、授業活動の中核的参与者(現話者、受け手、次話者)の変更に伴って移行するため、その頻度が高ければ高いほど、中核的参与者となる人が多くなり、授業がより活性化されると考えられる。

第6章では、授業内相互行為の「局所的な管理運営のシステム」である「順番交替」に着目した。特に、相互行為の展開に影響を及ぼす、能動的な行為である「教師による順番譲渡」および「学生による順番獲得」に関して分析を行う。分析の結果、以下の結果が得られた。(1) 教師の「順番譲渡」の方法には「順番指定」と「順番募集」という2種類がある。教師は、授業内の各活動の目的に応じてこれら2つの「順番譲渡」の方法を使い分け、学生の授業への参加を導き、授業内の順番(参加機会)の割り当てを実行している。順番を譲渡された学生がそれを辞退したり、回避したりする場合、教師は学生への順番譲渡を完成させるために、「催促」、「宛先変更」、「補足・追加」、「話題変更」といった順番再開の方法を使用し、学生を授業への参加に誘導する工夫をしている。また、順番譲渡の技法は、主に「応答要求」および「アドレス・デザイン」という2つの要素の結合によって構成されている。どちらかの言語的表現が欠ける場合、欠けている部分を何らかの非言語的資源で補えば、順番の譲渡が成立しうる。(2) 学生の「順番獲得」は、順番を、教師から獲得する場合と他の学生から獲得する場合に分けられる。前者では、学生は「挙手」などの形で、教師から許可を得てから「順番獲得」を行うのが一般的であるが、その前の連鎖において教師による「順番募集」が行われていれば、学生は教師の発話の途中でも順番を獲得することがある。後者で

は、日常会話における順番獲得の技法が志向され、順番獲得がより自由なかたちで発生し、学生は他の参与者より先に意思を表明することを通して順番を獲得するのが一般的である。また、学生間での連続する順番交替によって学習課題の解決が停滞する場合の対処法として、教師が「フィードバック F」と「始発 I」の組み合わせという形式で、学生の行動を授業課題の目的に沿う行為連鎖に戻すこと以外に、教師から発話権をもらった学生がその学習課題に関連する新しい「I」を出すことも挙げられる。

第7章では、授業の終了部に着目し、授業を終了するプロセスおよび参与者が相互作用を停止させるために用いる手続きに関して分析を行う。その結果、以下のようなことが明らかになった。(1) 日本語授業の終了部は2段階のプロセスを持ち、「前終結」と「終結」に分けられる。「前終結」は「最終話題や活動の完了」あるいは「授業全体のまとめ」という形式で出現していて、「終結」は「終了宣言」、「授業後の作業への言及」、「再接触への言及」、「礼儀的決まり文句」、「別れの挨拶」という5つの要素の多様な組み合わせによって構成されている。(2) 「前終結」においても、「終結」においても、主導する側は教師である。教師は様々な言語的・非言語的資源を用いて、学生との相互行為を終了へと導き、学生側は様々な非言語的資源を使用して、教師の終結への意向に対する意思を表明する。(3) 授業の主要部と終了部を連結する移行場である「前終結」において、教師が使用する手続きのパターンは主に2つある。1つは学生の意向を確認して「終結」に進むか否かに関する交渉を行うパターン、もう1つは直接「ディスコースマーカー」を使用して一方的に学生との相互行為を終結に向かわせるパターンである。(4) 「終結」という部分は、教師の様々な「マーカー」の使用によって局面ごとに構造化されている。教師は各局面における学生の非言語行為を手がかりに、授業終了の進捗状況を適宜調整することができる。

第8章では、本研究のまとめを行う。さらに、今後の研究課題を挙げ、研究の展望について触れる。

以上のように、本研究は、「授業」という場を多層的の局面によって構造化される過程と見なし、実際のデータに基づく帰納的な分析を通して、授業における教授・学習の在り方や授業展開のメカニズムを相互作用の視座から考察した。このような研究を進める目的は、授業で日常的に観察されるが、行為者自身が気づいていない相互行為の仕組みを浮き彫りにすることにある。そこに存在する規則を明らかにし、相互行為の仕組みを顕在化させることで、授業でおこる現象に関して改めて深く考察・認識しようとする際の一資料を提供するものである。